

ねじりはちまき

11月 立冬 小雪の月となりました。

3日文化の日、8日立冬、15日七五三、22日小雪、23日勤労感謝の日です。

髪の毛は季節に関わりなく抜けるものですが、秋から冬にかけてそれが多いので折からの木の葉の落葉になぞらえたのでしょう。木の葉髪などと言いますね。髪の毛の薄くなり始めた人にはわびしい季節ですね。11月8日立冬です。陽の光も弱く、日脚も目立って短くなり、冬枯れの景色が伺えるようになります。22日は小雪です。まだまだ街々には本格的な雪は見えませんが遠くの山々のいただきには真っ白な雪が見え荒涼とした冬の到来の近いのを感じます。厳しい冬をしのぐ為にも、健康には十分注意してお過ごし下さい。

幸田 常一

* * * * *

<会社近況>

今年はなかなか秋にたどり着きませんでしたね。10月に入っても日中はぽかぽか陽気で、秋とは思えない日が続いています。朝晩は気温がだいぶ低くなり、暖房が必須です。

ただいま、本宮市、大玉村の現場をお世話になっております。

<木のはなし>  ケヤキ 

ケヤキはニレ科ケヤキ属の植物で、分布は北海道以外の全国にある木だそうです。とても大きく高い木ですので、学校や施設などでも目にすることがあるのではないかでしょうか。木材としても優秀で耐水性、耐久性に優れています。

* *

<11月> 旬なレンコン

レンコンの旬は11月から2月だそうで、おせち料理の時期に最も出荷量が増えます。秋口に収穫されるのは、柔らかくてあっさりとした味わいです。冬物になると粘りが出て甘みが増します。便秘対策、疲労回復、肌の調子を整えるなど様々な効果があるようです。きんぴら、酢のもの、煮物とどう調理してもおいしいですね。ぜひ、今が旬のレンコンを楽しんでみて下さい。

* *

令和5年11月5日発行

<発行責任者>幸田久美

有限会社 幸田建設

969-1204 本宮市糠沢字八幡1-1

電話 0243-44-3816

<後記> 今年も残すところあと2ヶ月

になりました。年末に向けて掃除や、雪

の備えも必要ですね。今年はエルニーニョ現象の影響による暖冬予測だそう

です。

(ほしの)

日本古代の国際関係の歩み

最近日本の5世紀以前のことについて調べていたら、日本は島国でありながら意外と早くから朝鮮半島や中国と交流というか繋がりをもっていたことに気づいた。そこで日本古代の国際関係についてその歴史を辿ってみたいと思った。

年代が古くなると、中国の歴史書（正史）に記載されているものに頼るしかない。そこには日本のが3件記録されている。残念ながら日本側にはその記録がないのである。

①先ず、1世紀のことである。「後漢書」東夷伝によれば、建武中元二（57年）に倭（日本）の奴国が貢を奉り朝貢したので、光武帝が奴国王に「印綬」を授けたと書かれてある。この印綬が博多湾の志賀島で発見された「金印」であると考えられるという。

②次に「三国志」の魏志倭人伝に、日本の邪馬台国とその女王「卑弥呼」のことが記載されている。それによれば3世紀の日本は、女王の君臨する邪馬台国を中心とする国が存在し、また女王に属しない国も存在していたという。景初2年（238年）に邪馬台国女王卑弥呼の使者が明帝へ拝謁を求めて洛陽へ到着したとある。この邪馬台国がどこにあったかについては、北九州説と畿内説（奈良付近）の双方が対立して決着はついていない。

③次に中国南朝の宗帝国の正史「宋書」によると、倭国（日本）の5代王（讚・珍・濟・興・武）が5世紀初頭から末葉までおよそ1世紀に亘り普・宗・齊の南朝に朝貢したとある。倭の5代王が日本の歴代天皇のいつの時代を指すのかは明らかになっていない。いずれにしても、倭王たちは朝貢によって中国の先進的な文明を摂取するとともに、王に従わぬ諸豪族を抑え、国内の支配を安定させたい意図があったであろうと思われる。

以上3件を紹介したが、日本史の授業で学んだ遣隋使や遣唐使のずっと前に「朝貢」という形で中国（帝國名は変わるが）と関わりを持っていたのに驚いた。それにしても、中国のこと（情報）をどうして知ったのか、朝貢した方がいいと誰から勧められたのか、そして中国の時の都にどういうルート・交通手段で行ったのか。小生の想像であるが、倭としては早くから朝鮮半島との交流がなされていたので、朝鮮半島の国々、人々（中国人もいる）から情報がもたらされたのであろうと思われる。それにしても、船で中国へ直行したのだろうか。でも、この時代船での直行は考えにくいのではなかろうか。朝鮮半島経由ではなかつたのかと思ってしまうが、皆さんはどう思われますか。

ここでひと言。「朝貢」とは何か。前近代の中国と周辺諸国との関係だが、中国皇帝に対し周辺諸国が貢物を献上し、皇帝側はその国の君主であることを認めて、恩賜として返礼品を持たせて帰国させることで外交秩序を築こうとするものである。ただし日本は、他のアジア諸国のように中国皇帝と君臣の関係（冊封関係）になることはなかった。

さて倭の5代王の次は中国との関係はどうなるのか。それから1世紀を経て隋との関係で動きが出てくる。33代推古天皇の時代である。600年（推古8年）～618年（推古26年）の18年間で3回（その後2回か？）遣隋使を派遣している。推古天皇は女帝で政事はご案内通り聖徳太子が担っていた。聖徳太子は中国を意識し、十七条憲法を定めたり、官位十二制を定めたり、仏教を振興（法隆寺建立）するなど策を進めていた。そして第2回の遣隋使（小野妹子）派遣の時あの有名な「日出處の天子、日没處の天子に到る、恙（つつが）なしや」で始まる燐帝宛ての国書を携えさせたのである。中国との関係でこれまでの朝貢ではなく、当時としては対等な外交を目指した勇気ある決断だったと思われる。隋の側はどう受け止めたのだろうか。また聖徳太子としても対等な関係を築くことにより、日本として何を目指したのかその真意は分かっていない（朝鮮半島の情勢との関係？）。それでも、学ぶべきものは学ぶ姿勢は変わらず、留学生や留学僧は遣隋使とともに中国に送り込んでいたのである。先に触れた使節団のルートは、調べてみたら船で朝鮮半島の西岸に沿って進む新羅航路を取っていたという。ところがこの新羅航路も遣唐使の時代になると取れない時期が来る。日本が百済を支援した白村江の戦い（633年）で唐・新羅連合軍

に大敗を喫してから、朝鮮半島を統一した新羅と関係がぎくしゃくし始めたことによる。それで中国へのルートはどうなったか。そこで奄美や琉球を島伝いに行く南島航路（702～752年）、次いで対馬海流に逆らって黄海を横断する大洋航路（773～838年）を取ることを余儀なくされた。沿岸航行を前提とした構造の遣唐使船では、外洋の速い潮流を乗り切ることが難しく、たびたび難破する命がけの航海となった。実際難破して派遣目的が達せられなかつたこともある。そこまでのリスクを冒してまでも、唐から学ぶべきものがあったということだろう。その情熱たるや言語を絶するものがある。

遣隋使の後も引き続き派遣される。遣唐使である（中国では隋が滅び、唐に変わる）。第1回の遣唐使派遣は34代舒明天皇2年（630年）であり、それから200年以上続くことになる。その派遣頻度は、600年代が6回、700年代が8回（その外2回中止となる）、80年代に2回（最後の18回目は34年ぶりであった）となっている。そして894年に19回目が計画されたが、菅原道真の建議により中止となり、遣唐使は幕を閉じた。

遣唐使の関係で話題になるのは、やはり仏教についてであろう。一つは鑑真和尚のことである。鑑真是唐の僧侶で奈良時代に帰化し、日本の律宗の開祖となった人である。奈良の唐招提寺も創建した。遣唐使船と関連するのはこの鑑真が来日する時の話である。鑑真是日本からの熱心な招請により日本への渡航を試みるが5度も失敗し、6度目を企画した時ちょうど日本からの第10次遣唐使船（752年）が来ていて、それが帰途に就く時うまく乗船できたのである。日本に着く時までにベトナムに漂着するなど難儀を重ねるが、とにかく念願の目的を達成したのである。決意してから12年経っており、失明もしていた。二つ目は、804年の第17次遣唐使派遣の時、最澄や空海が派遣されたのである。ご案内のとおり最澄といえば天台宗の開祖であり、空海といえば真言宗の開祖である。お二人とも中国で密教の奥義を学んでこられたのである。そして日本仏教界に大きな影響を及ぼした。このような逸材を生み出す大きな役割を遣唐使は持っていたといえる。

次に仏教以外の点でもう一つ述べてみたい。中国と対等の関係を目指す、一人前の国として認めてもらう努力である。その代表例として飛鳥時代後期の第40代天武天皇（673～686年）を取り上げたい。当時は中国から「倭の大王」と呼ばれていたが、天武天皇は「天皇」を称号し、「日本」を国号にした初めての天皇である。そして、一人前として認めてもらうための条件整備としての3点セット、即ち律令制の制定、歴史書の編纂、然るべき機能を備えた都の造営への道筋をつけた天皇である。律令（律は今でいう刑法・令は今でいう行政法・民法・商法）は統治の法令の整備であるが、天武天皇は飛鳥淨御原令（令のみ）を制定した。それは後に「大宝律令」として完成する。歴史書は後に「古事記」や「日本書紀」として結実する。新しい都として「藤原京」を造営するが、長安を模した都としてはやがて「平城京（奈良）」の造営として結実する。

遣唐使派遣によって唐の日本に対する認識は変わったであろうか。否のようである。しかし、国家統治のシステムを整備する点においてはプラスになったことは疑いない。例えば律令制についていえば、これを制定して実施に移したのは、周辺諸国で日本のみである。以上中途半端になってしまったが、今回はこれで終わる。

北海道 三百名山3山、12泊13日

日本三百名山のうち北海道に残っている次の3山を、8月16日から28日にかけてマイカー、フェリー利用で登った。

同行者は、昨年9月初めにカムエク（※）と一緒に登った古稀トリオ、新潟の男性Aさん、横浜の女性Yさんと自分S。Sが一番若い。

ともに三百名山を目指す山友で、今回の山行が無事終われば、Aさんは三百名山達成、Yさんは残り3山、Sは残り13山となる。各自登り残している山によって同行者は次のようになった。

（百：日本百名山。◎：日本二百名山。○：日本三百名山）

- 1 ニペソツ山（◎2013m） Aと S
- 2 神威岳（○1600m） AとYとS
- 3 ペテガリ岳（◎1736m） YとS

※カムエク：カムイエクウチカウシ山（◎1979m）の通称。北海道日高山脈のほぼ中央に位置し、幌尻岳（百2052m）に次いで日高第2の高峰。日本三百名山最難関の山の一つ。昨年9/2～9/4に古稀トリオで中札内村の道の駅を拠点に登った。

大まかな予定としては17日AさんとSが合流、Yさんとは21日に合流することを決めていた。

8月16日（水）

18時過ぎマイカーで、仙台港発太平洋フェリー「きたかみ」乗船。B寝台に落ち着く。ラウンジの海の見えるカウンターの端に席を取り、妻の作ってくれたおにぎり弁当を広げる。3つの丸テーブルは家族連れと熟年グループ（ライダー？）でにぎやかだ。時間通り19:40出航。港の灯りがだんだん少くなり外海に出ることがわかる。展望風呂入浴。漆黒の海原にところどころ白波が見えたが、日本海を北上中の台風7号の影響はないように思えた。

17日（木）

6時頃起床。ラウンジから外を見ると晴れていて気持ちいい、揺れも感じない。でも風呂に行ったら「台風の影響で閉鎖」されていた。

7:30レストランで朝食。バイキング方式で1100円。食後のコーヒーはラウンジに持ち出せた。

11時予定通り苫小牧港着。今日は15時頃新潟のAさんと帯広の北、上士幌町の道の駅で合流予定。

Aさんは16日新潟港12:00発17日小樽港4:30着なのでとっくに着いてい

るはず。

日高道沼ノ端 IC～道央道～千歳恵庭 JCT～道東道～音更帶広 IC 14 時前～足寄国道。日高山脈をトンネルなどで越えるときには雨だった。

途中どこか食堂で昼食と思ったが、道東道には食事の施設はなかった。足寄国道でも急いでいたので見逃した。結局 14 時過ぎ中士幌のコンビニで弁当を買い車の中で食事した。北海道のコンビニでは弁当類が充実している。車の燃料も補給し、上士幌町の道の駅に向かう。

Aさんとは今年の 4 月半ばに猿ヶ番場山 (○1875m) を登った帰りに新潟の五泉市で会って以来だ。15 時過ぎ道の駅着、中ほどに新潟ナンバーの軽自動車を見つけすぐ脇に車を止めた。

屋内の休憩スペースに Aさんがいた。天候によっては 1 日様子を見ても良いと話し合っていたが、翌日の天気は良く、しだいに天気は下り坂とのこと。Aさんはすでに幌加温泉手前のニペソツ登山口を確認してきていた。

車中泊は駐車場も広く、トイレもきれいな国道 273 号脇の除雪ステーションが良いだろうとなった。

途中コンビニで食料を調達し、幌加除雪ステーションに落ち着く。すでに 1 台停まっていた。

お湯を沸かししっかりと食事する。Aさんのクーラーボックスには缶ビールがたくさん入っていた。氷も補充してきたらしい。

山友との語らいは楽しいがほどほどにして就寝する。

18 日 (金) ニペソツ山 (2013m)

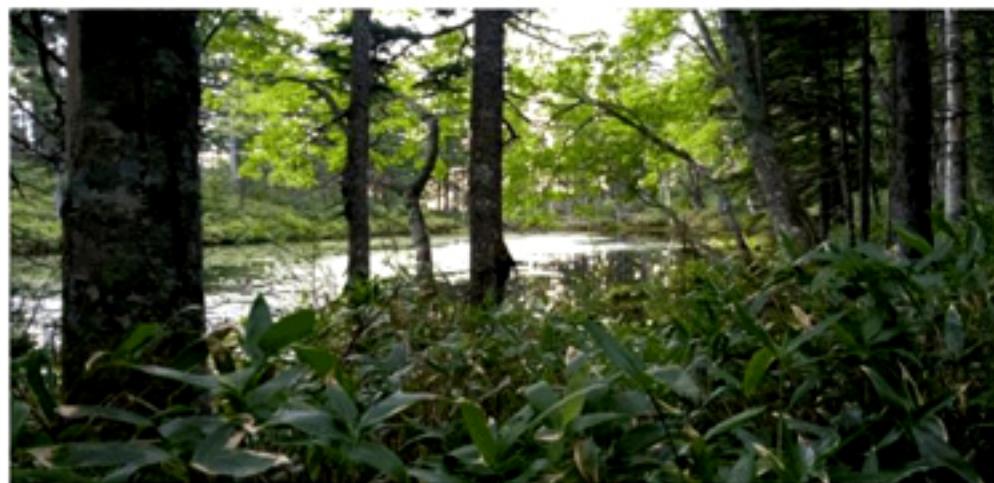
3 時半に起床し、クマスプレーをベルトの右側に下げるなど準備する。バナナを食べ 4 時過ぎ除雪ステーションを出発。10 数台停められるゲート前の駐車場は低地がぬかるんでいて乾いている高みに車を止める。すでに若者がいて出發して行った。

4:35 出発、ゲートの所で登山届に記入する。林道は幅広くよく使われているようだ。2 km の林道歩きを終え、山に入していく。ニペソツ山頂まで 10.5 km と表示されている。往復で 25 km 歩くことになる。(写真下)



樹林帯の登山道はよく歩かれていて藪はない。ところどころに看板が立っていて「ニペソツ山頂 ○km 幌加登山口 ○km」と表示されている。

三条沼(写真次頁)を 6 時半前に通過する。



シャクナゲ尾根（稜線）の登りにかかるとササのブッシュや痩せ尾根の急坂の登り下りになる。シャクナゲの群生地もあった。8時過ぎ展望台と思われるところを通過する。ガスで山頂は望めない。

いったん下りトラバースして、主稜線に登り返す。中年の人と若者のそれぞれ単独行の二人が降りてきた。風が強く、ガスで何も見えないので山頂はあきらめ引き返してきたとのこと。

主稜線に出たところでカッパの上着を着けたが、バタバタとはためき苦労する。Aさんが先行し、テープを目印に進む。登り切ったところは平場になっていて、標識と携帯トイレのブースがあった。前天狗か。しばらく行くと緩やかな下りになるが岩場で歩きにくい。この辺から自分が遅れ始める。鞍部まで下って休んでいるうちにガスが切れて青空が出てきて風も弱くなった。軽く食事する。下ってきたところを振り返る（写真下）。



再び登り返しいよいよニペソツ山に取り付く。（写真次頁上）とんがっているところが山頂。

下りはついていけるが登りになると歩みが止まってしまう。山頂まで1kmの看板を過ぎたあたりで、全身がコ

ントロールできなくなりストップして前に進めなくなってしまった。

Aさんが引き返ってきて、水を持ってあげるからザックをデポし空身で登るよう指示された。自分としても12km近くを歩いて残り1kmを切ったところで引き返すことはできない、這ってでもたどり着きたい。水を2本持つてもらい、ザックをハイマツの上に置きストックと携帯だけを持って自分が先行しゆっくりと歩を進めた。休まずに登り12:20山頂にたどり着くことができた。あこがれのニペソツ山、出発から8時間、12.5km歩いた。

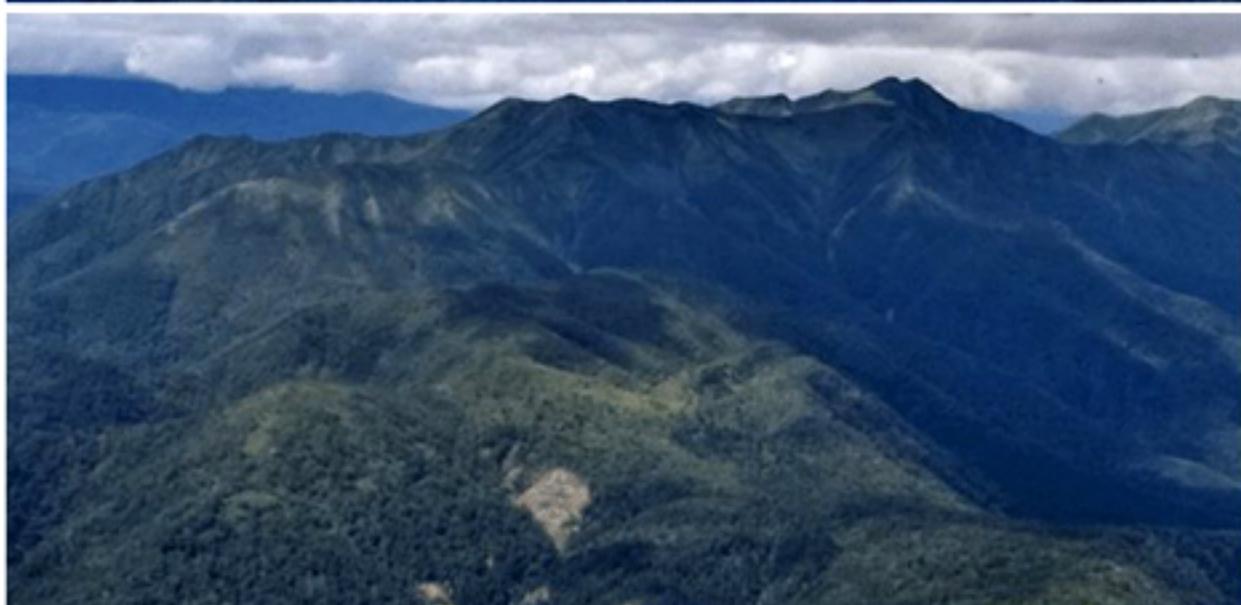
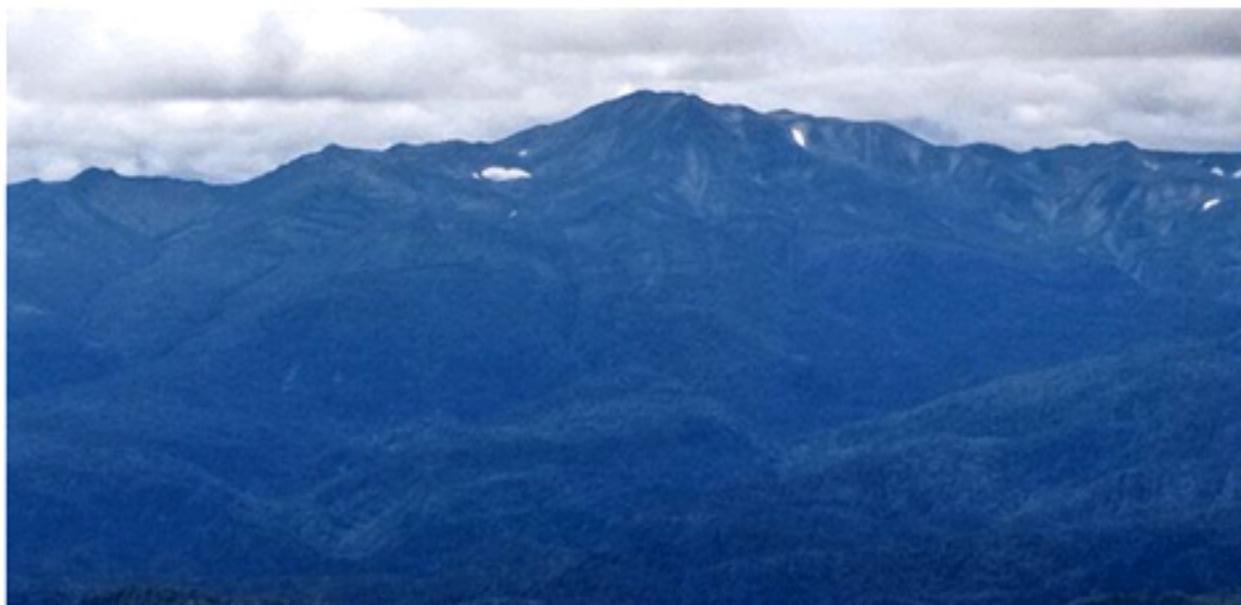
Aさんがまず取り出したのは小さな缶ビール、コップフェルに注いでもらい、登頂を祝して乾杯。お湯を沸かしカップラーメンを作ってくれた。甘いものも頂く。自分はAさんガイドのお客様のようだ。Aさんには感謝しきれない。



山頂からの眺め

大雪山（旭岳 百 2291m）は雲の中だがトムラウシ山(百 2141m)と縦走路が見えている。(写真中、中央はトムラウシ山)

昨年登った石狩岳・連峰が近くに見える。(写真下、中央右の双耳峰が石狩岳本峰)



登ってきた道（山々）を振り返る（写真下）。糠平湖が右手にうっすらと見える。



Aさんに撮って貰う（写真下）



約 1 時間休んだので疲労がだいぶ回復した。13:15 下山開始。何とか無事に下山したい。一人じゃないから心強いが。ザックを回収し、往路を忠実に戻る。緩やかな下り斜面では、姿は見えないがキュッキュッというナキウ

サギの声が聞こえた。

明るいうちにロープが設置されている急坂の所や難所は通過し、踏み込まれた一本道で迷うこととはなかったが距離が長かった。

ほぼ 1 時間ごとに休みを取ってくれて、往復 25 km を歩き終え、林道のゲート着（駐車場）は 20:45。4:35 のスタートからは 16 時間 10 分経過していた。

除雪ステーションに戻って、Aさんは手品のように缶ビールを 2 本取り出し、カンペーイ！

お湯を沸かしサトウのごはんとレトルトのカレーを湯煎し夕食にした。駐車場には車が 1 台あり、若者から「静かにしてください」と注意された。焼酎のお湯割りを飲みながら声を低めて話をした。翌日は予定がなかったが 12 時を回ったのでお開きとした。



19日（土）

2泊お世話になった除雪ステーション（左側の軽と白い車がAさんとSの車、写真左）。若者はすでに出発し、別の車が止まっていた。

靴やザックカバーを洗い草

の上に干す。朝食を摂りながら今日の予定を相談する。神威岳を登るためのYさんとの合流は21日なので2日間の余裕がある。まずは携帯が通じる上士幌の道の駅に行き、3人合流箇所の太平洋に面した道の駅三石（みついし）の先の襟裳岬にでも行こうとなった。

上士幌の道の駅にて休憩。開店して間もないのに結構なお客さんがいた。地元産の牛乳とソフトクリームを求めAさんに差し上げる。昨日の山頂でのカップラーメンのお返しですと断って。Aさんは笑っていた。

AさんがYさんと連絡を取り合ったら、すでにYさんは新潟港でフェリー乗船を待っているとのことで、1日早く来られることになった。その結果、襟裳岬観光は自然消滅し、三石に行く途中の、昨年カムエク登山のために3泊お世話になった中札内村の道の駅に泊まることになった。帯広を経由し、高速道路の無料区間を走る。北海道は移動距離が長い。

まずは、昨年カムエク下山後に利用した村内の温泉施設に向かった。樹木に囲まれた露天風呂でゆっくりして前日の疲れを癒した。（写真下、上）



1年ぶりの道の駅は昨年同様賑わっていた。キャンピングカーも5~6台停まっていた。昼食は、道産のソバを食べた。おいしかった。富山県から移住した旧開拓農家を移築した雰囲気のある店だった。（写真下）



車の駐車場所近くのテナントの地鶏（骨付き）唐揚げを予約した後、夕方早めに買い出しに出かけた。

道の駅向かいのスーパーでビールや惣菜を買う。Aさんはク

ーラーボックス用に2袋までOKという氷を詰めた。

17時ぐらいから、から揚げ屋の前で食事を始める。高校生などが並んで買っている店だ。高校生のためにテーブルを空ける。店が閉まった後では独占状態。ビールの後には焼酎、Aさん持参のワインまで空けてしまった。自分はテーブルに突っ伏し、Aさんは長椅子に寝てしまう。

ふと気づき、5mくらい離れた各自の車に戻って寝る。

20日（日）

夜中から雨が降っていた。Aさんはなかなか起きてこない。熟睡できるのはうらやましい。雨の中では食事を作るのも面倒だ。相談の結果、道の駅のテナントで9時に開店する小さな店でテイクアウトすることにした。雨でテーブルが使えない。卵かけご飯を注文し各自の車の中で食事する。

10時前、三人の合流場所、太平洋岸の新日高町三石の道の駅に向かう。高速道の無料区間を経由し山間部を浦河町に抜け、海岸沿いの国道235号（浦河国道）を襟裳岬の反対方向北西に進み道の駅みついしに12時過ぎに着く。

小樽港4時半着のフェリーを利用したYさんはすでに着いていた。3人そろうのは1年ぶり。

神威岳（1601m）

道の駅のレストランで食事しながら相談する。神威山荘に向かう前に食料を調達する必要がある。YさんとSはペテガリ岳の分も必要だ。自分は基本的なレトルトのごはんやラーメン、缶詰などは車に積んであるが補充する必要がある。Aさんは以前ペテガリ岳を登った際にこの辺の土地勘がある。駅や役場のある浦河町の中心部まで戻り、小さなコンビニでなく農協経営のAコープに案内してくれた。混んでいた。

国道235号から別れ、元浦川に沿って舗装路を進み上野深（かみのぶか）の集落を過ぎたら砂利敷の林道となる。対向車はめったに通らないが所どころ水たまりや凹みがありスピードは出せない。27kmを1時間以上かけて最後の分岐を右に行くと終点の神威山荘に15:30に着く。（分岐を左に行くとペテガリ岳への駐車場）Yさんの左前輪のホイールがなくなっていた。



ログハウスの神威山荘は1部屋だけの、きちんと寝れば20人ほど泊まれるか。トイレが付いているが電気と水はない。

車が2台停まっていた。18時頃に自分たちと同年配の女性と少し若い男性が下山してきた。

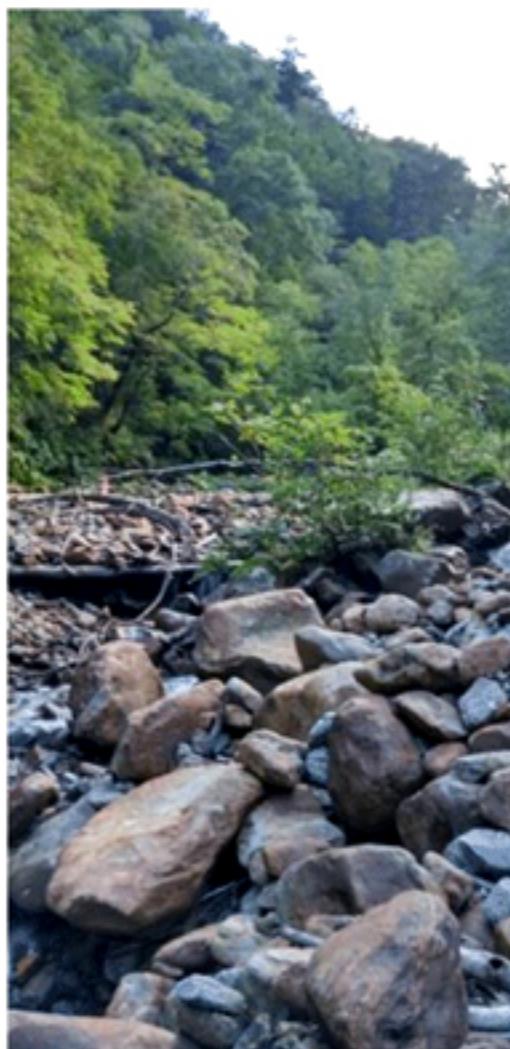
話すと男性はガイドさんで女性は今日の神威岳登頂で日本三百名山を達成した

とのこと。私たちと同じ目標を持って頑張ってきたことに 3 人で拍手をして祝福した。札幌ナンバーの車で、山側のところに沢靴を忘れていったが連絡のしようがない。

小屋は自分たち 3 人だけだった。ランタンを灯し、暑いので蚊取り線香を焚いて窓を開けた。小屋の小さなテーブルを囲み食事する。お湯の沸かし方もそれぞれ違った。Aさんは山に持ち込む小型のガスボンベとコッフェル、Yさんの燃料は 3 cm 角くらいの固形アルコール燃料。一個で丁度お湯が沸くように計算されている。Yさんは装備も山行計画も細部にわたってち密だ。Sは家庭用ガスコンロで火力が強い。まずは Aさんが A コープで仕入れた缶ビールで乾杯！ Yさんは形だけお付き合いする。その後 S は焼酎のお湯割りを飲んだが程ほどやめた。自分ではそんなに飲んだつもりはなかったが、翌日の山行にはこれが良くなかったかもしれない。朝方は冷え込んだ。

21日（月）

4 時に起床。レトルトのごはんと「すき焼き」を食べる。朝方やってきた足立ナンバー車の男女二人が出発して行った。6 時、沢靴を履いて出発。10 分ほど林道を歩くとニシュオマナイ川に出る。渡渉が始まり、岸に上がった時には藪の踏み跡を進む。しだいに川幅は狭まり傾斜が出てきて大きな岩がゴロゴロしてくる。岩やエゾマツの倒木を避けたり乗り越えたりして赤テープを目印に 6 つの目で確認しながら進む。特に広い二股の所は道を間違えないように慎重に進む。赤で矢印が書かれている大きな岩の所で渡渉を終わる（写真下）。



沢靴から登山靴に履き替える。すでに先行の二人の靴や靴下が干してあった。Aさんが浄水器で浄化した水を貰う。この後水場はない。すでに4時間経過している。

10:30、山に入り頭よりも高いササに覆われた急斜面を登る。ときにササや低木の枝に捉まってよじ登る。自分が先頭を務めるが馬力が出ない。昨夜の焼酎が利いてきたのか？ Aさんが気をもみ始める。ニペソツ山の山頂直下の自分の姿を思い出す。

Aさんの指示で先頭をYさんに交代する。Yさんは体重が40kgに満たず身長も150cmを切っている軽量非力なのに男と同等の荷物を背負って、山登りのパワーはどこから来るのか不思議だ。2番手の自分が引き離される。木の根っこや段差のあるところで少し追いつくがすぐに離される。樹林の急登で休む場所も見つからない。次々と現れるニセのピークに何度も落胆する。先行した男女の二人組が下って来てそれ違ってからもだいぶ時間が経過した。

神威岳山頂に14:10到着。出発してから8時間かかった。標高は1600mでニペソツ山の歩行距離の半分くらいだが時間は同じくらいかかった。山頂は岩場で4~5mmくらいの丸くずんぐりした虫がびっしり岩や山頂標識に張り付き飛びまわっていた。人にも張り付く。Yさんは写真も撮らずにタッチただけで下って行った。Aさんに撮って貰う。(写真下)



すぐに下り、体に張り付いた虫を払う。虫のいないところまで下ろうとするが、急で狭く3人が休める適当な場所が見つからない。10分ほど下ったところで傾斜はあるがハイマツの間に座れる場所を見つけて休

み、食事する。神威山荘着は暗くなつてからになる、などと話し合う。

30分休み14:50下山開始。引き続きYさんが先頭、自分は真ん中、Aさんがしんがり。枝が張り出し木の根の段差のある狭い獣道のような道、ジグザグで複雑な急坂をYさんは時に滑って転びそうになり枝に捉まつたりしながらも軽快に下つて行く。河原から山への取り付き点に16:30着。

河原に干していった生乾きの靴下と沢靴に履き替え、登山靴をザックに収納する。

16:55 沢を下り始める。登りの時は小屋から4時間かかったので明るいうちには着けないことが明白になった。腹を据えてケガしないようにゆっくり行くことにした。昨年のカムエク下山時のビバークの再来にならないようにならねなどと話し合った。昨年はAさんがヘッドランプをテントにおいて来てしま

ったが今回は照度の強いランプを用意してきた。今回のニシュオマナイ川はカムエクの時の川幅よりも狭いし距離も短いので大丈夫だろうと話した。3人いるのは心強い。先頭は自分になり、これもカムエク下山時の渡渉と同じ。

神威山荘着は21:30。登りよりも時間をかけた下山となった。朝6時スタートし15時間30分かかった。

小屋にはワゴン車1台が停まっていて部屋に中年(?)男女が寝ていた。女性が起きて快く受け入れてくれた。相当疲れているのだろう、男性はいびきをかいだり寝ていて、起きることはなかった。騒ぎはしなかったが食事もしたのでうるさかったことだろう。

22日(火) ペテガリ岳(1736m)

早朝、先客二人の出発の準備で目が覚める、寝不足だ。二人はペテガリ山荘を前日の午前1時半にスタートしてペテガリ岳を往復し、ペテガリ山荘に泊まらずにその足で神威山荘までやってきたとのこと。相当な健脚だ。翌日からの自分とYさんの山行を楽観してしまった。男性は自分たちに年齢的に近いと見たので一層、甘く考えてしまった。既に登っているAさんの話でも、危険なところはなく、いくつものピークのアップダウンがあり距離が長いだけとの話だった。ガイドブックによると以前はペテガリ山荘まで車で行けたが林道の崩壊で通行止めになっていると書かれている。Yさんとはお昼までにはペテガリ山荘に着きたいねと話していた。躁状態で、自覚しないが疲れている自分はいろんな情報を自分に都合の良い方にバイアスをかけて考えてしまった。ガイドブックでは神威山荘から約800m離れたペテガリ山行の駐車場から3時間半から4時間と書かれているので、前日の15時間半の疲れもあり出発が遅くなってしまった。食事し9時に出発。

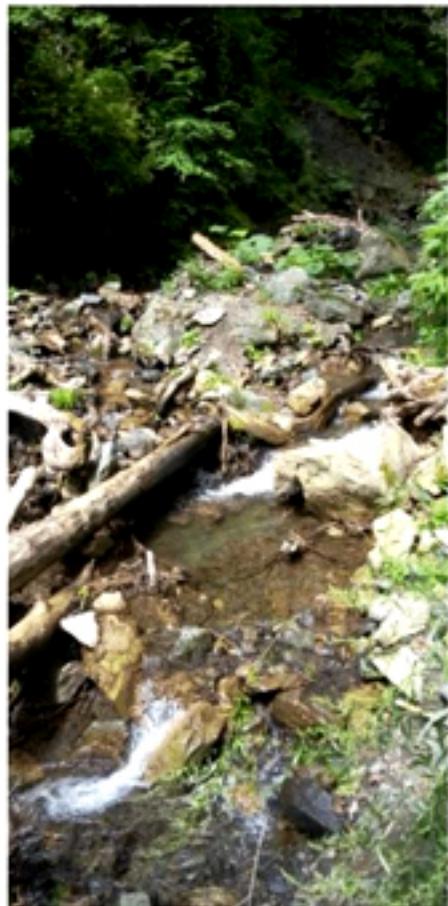
既にペテガリ岳を登っているAさんとはここでお別れ。自分たちを見送ってくれた。

ペテガリ山荘に向かう駐車場には数台停まっていた。(写真下) 空模様は曇り。



札幌ナンバーのワゴン車の5人の登山者が下山してきてみんなでハイタッチしていた。ペテガリ山荘を早く出てきたのだろう。沢靴を履き、クマスプレーをベルトにつるし、10時出発。工事車両が通る林道を行く。工事個所を過ぎると道幅が狭くなり、しばらく行くと矢印があり小沢に入り遡上する。

水量は多くないが曲がりくねっていて流れが急なところもある。(写真次頁左タ



YAMAP で現在位置をみ返す。「小滝の所を認しルートを見つける。滝の右側を Y さんはる。

沢はだんだん狭くは赤テープの目印方から急登になり、さる。ササや木の根、枝、捉まってよじ登る。登り切った所がガイドブックに書いてある標高 680m の「乗っ越し」のようだ。文字通り降りるところも急斜面で長いロープがある。休憩し雨具の上着を身に着ける。我々の次に若い女性と熟年男性が登ってきた。女性はガイドさんで、指示は的確で、先に降りて行ったが男性は滑って苦労していた。

次に自分がロープに捉まって降りたが、足をかけるところがなく滑ってザックとおしりをべったりと汚してしまった。Y さんは自分より身軽に下りてきた。「乗っ越し」を下り切ったところで、すでに女性ガイドさんと男性の姿は見えなかった。

しばらく歩くと低い山々に囲まれた平らな草原状の所で休憩する。推測だがかつては沼=湿原だったのではないか。ところどころ低木が生え始めている。単独行の若者が元気に「山荘でまつてま～す」と声をかけてくれた。

以降はほぼ平坦で 5m～10m くらいの幅の川を何回か渡渉すると林道に出た。この林道が通行止めになっているものか。飽きてきた頃ようやくペテガリ山荘

テ、ヨコ上)赤いテープを目印に進んでいく。テープが見つからないところがあ

った。右岸には踏み跡の明瞭なところがあったが、急すぎて人が重いザックを背負って登ることが不可能と判断した。おそらく鹿などの獣道だろう。ザックを下ろし Y さんの携帯の確認し、ガイドブックを読む」とあったので再度確認（写真左タテ）。自分は左側を通って小滝を超える。

なり分岐のあるところで向に進む。沢が涸れたあたらに小雨が降ってきて滑設置されているロープに

(写真下) に着く、16時半過ぎ、6時間半かかった。ガイドブックのコースタイム 3 時間半～4 時間を大幅に超えていた。



山荘の 1 階はすでに先客が何組かいて、先ほどの若者が、2 階が空いていると教えてくれた。2 階には先行した熟年男性と女性ガイドさんのほかに両隅に 2 箇所荷物が置いてあった。板壁を背に真ん中に場所を取り食事の

準備をする。Yさんは水を汲んできて浄水器で飲み水を作る。自分は背負ってきた水で間に合うと計算したが、余分にYさんの浄水器を借りて水を作った。

山荘には屋内と外の 2 か所蛇口から水が常時流れている。屋根付きの外の洗い場で沢靴とザックカバーを洗って干す。沢靴は山荘からの下山時まで放つておく。

男性 2 人連れの下山者が山を下りてきた。熟年者と中年のガイドさんらしい。13 時間半かかった、疲れたと言いながらも誇らしげだった。ガイドさんの威力は素晴らしい。

暗くなる前に水場に鹿の親子が水のみにやってきたので近づかないで遠巻きに見ていた。

食事をしに 2 階に戻ったら、すでに女性ガイドさんと熟年男性は横になっていた。自分たちの両側の男性登山者も身を横たえていた。

食事を済ませ 20 時頃には就寝する。暑いのでシュラフには入らずにその上に横になる。冷えてきたら入ればよいと思った。

23日（水）

3 時過ぎ起床。食事をしている間に女性ガイドさんの組は出発して行った。両隣の人達は登る人でなく登山口まで下山する人たちらしい、まだ寝ている。

4 時出発、山荘の横、上の写真の建物と標識看板の間から登って行く。ガスボンベとコップフェルは持たないが水 3.5L が重い。沢伝いの道を行くと砂防ダムの所から山に入って行く。いくつもの緩急のアップダウン（山々）を超えていったがペテガリ岳山頂は見えない。

5 時間ほど歩いたところの少し幅の広い所に、先行した女性ガイドさんがいた。よく見ると熟年男性が日陰に横になって目の所に腕を当てていた。ガイドさんの話だと山頂までの登山は無理なのでもう少し休んだら下山するという。

ガイド付きでも登れなかったら、その人はその山には登れないことを意味する。本人にとっては諦めきれないだろうが、もし目標にしていたのならば 200 名

山 300 名山は達成できないことになる。体調が悪かったならば、体調を整えてお金をかけて出直すしかない。見たところ自分たちと同じぐらいの年代と思われる所以他人事とは思えない。山は待ってくれるが人の加齢（体力の低下）は待ったなしだ。

山頂が見えるはずのピークに達するが雲が出てきて山頂は望めない。そこから大きく下って登り返すと山頂だ。中年の男性が山頂から降りてきた。自分たちはあと 30 分もすれば登頂できると考えていたが男性からあと 2 時間くらいと言われて半信半疑だった。Yさんの携帯はバッテリーも含めて電池切れになっていたので YAMAP の位置情報が使えない。自分の携帯は機内モードにしていたので電池の残量はあるが YAMAP にペテガリ岳の地図情報を取り入れてなかつたし、その山域では携帯が使えなかつた。

背丈ほどのハイマツをかき分けて山頂に着いたのは 14 時を回っていた。ガスの中で眺望は得られない。既にスタートから 10 時間経っている。神威岳と同じ 4~5 mm のずんぐりした虫が標識や岩に張り付き飛びまわっていた。

Yさんはすぐに撤退したかったが頼み込んで写真を撮って貰つた。

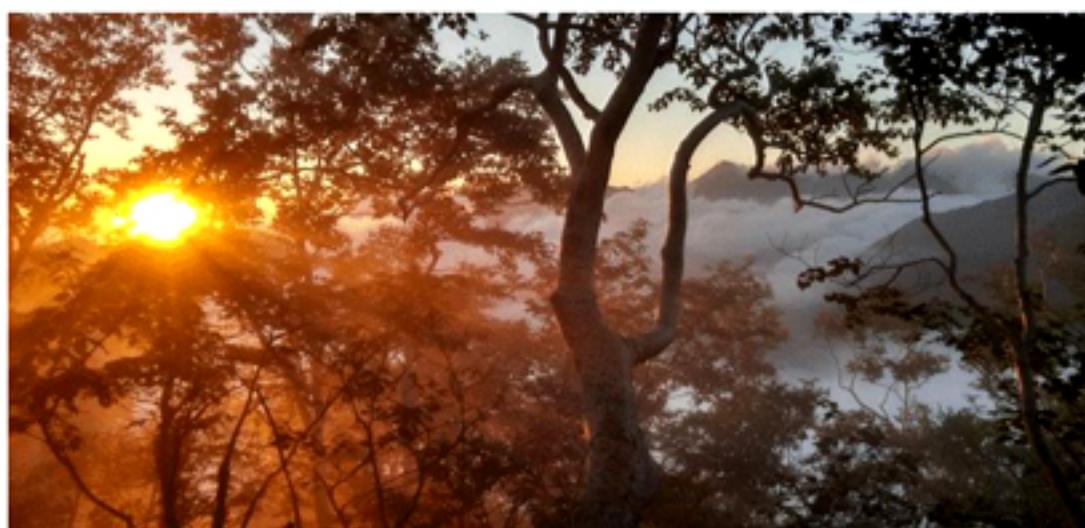


左写真：北海道 3 山目で当日 10 時間の山行後登頂の疲れ切つた姿。上半身の筋肉が消耗し丸く猫背になってしまった。

しかし、ペテガリ岳は許してくれなかつた。

山頂からの下山途中で、右のストックがなくなっていることに気づいた。ハイマツや低木の枝を避ける途中でなくしたらしい。少し戻ったが見つからなかつた。

いくつもの山を乗り越え往路を忠実に戻つた。樹間から、夕日と雲海に浮かぶ山の連なりがきれいに見えた。



かなりの距離は戻っていると思ったが暗くなってしまった。Yさんの YAMAP も使えないで現在地が分からない。しかも自分のヘッドランプが点滅し始め、3 段式の一番照度の強い照明が

消えてしまった。弱くすればある程度の時間は大丈夫と思ったがいつまで保つか分からない。一昨日神威山荘で充電して大丈夫のはずだったが充電されてい

なかつたらしい。登りが緩やかな、目印のテープがあるところでYさんと相談しビバークすることにした。二人ともビバークは予測しなかったのでテントやシユラフはもちろん持ってきていない。ラッキーだったのは、雨の心配はなく山の上でも暖かかったことだ。登山道脇の少し広い所に、刈り払い残されたササの枝を折って空間を作り休憩用のシートを敷き、雨具の上下を着てザックを枕に横になった。短くなったササの枝が当たったりして寝心地が良いとは言えない。頭上の空は満天の星できれいだった。二言三言話したがすぐに気持ち良く寝入ってしまった。Yさんも同様だったらしい。

しかしこれでも、ペテガリ岳は許してくれなかった。

24日（木）

翌朝夜明けとともに起床。簡単に食事し目印のテープを再確認し、歩き出す。疲れは取れたと思っていたが後日改めて考えるとそうではなかった。説明するのが難しいが。

ペテガリ山荘はすぐ近くだと思い込んでいたこと、体と頭の両方が歩くのはやめたがっていたことから強いバイアスがかかっていて、二人とも互いに充分確認することなく動き出してしまい、下ってしまった。もう少し下れば山荘に着くと思い込んでしまった。ところが後でよくよく考えると、山荘に着くためにはビバーク地点から登らなければいけなかった。いくつものピークの登下降があり景色も同じような感じで、疲れて判別がつかない、というよりも、判別しようとする意識まで至らない。ただ足と手を動かしていた。

Yさんは自分よりしっかりしていて、急坂の登りで、茂っている低木の枝に下がった目印のテープの所で休んだ際に、「この標識はきのう見たことがある」と言った。Yさんの携帯は電池切れでYAMAPは使えない。自分の携帯は機内モードにしていたため電池は残っていたので、地図情報を取り入れようとしたがなかなかうまくいかない。画面が細かく動いて一定しない。Yさんが丁寧に操作したら何とか地図を取り込み、現在地の印の点滅を確認できた。なんと点滅する矢印の方向はペテガリ山頂を指していた。

ここで、ようやく山荘方向とは逆方向に歩いてきたことを悟った、すでに5時間以上歩いている。鞍部のところまで下って休んでいるところに一人の中年男性がやってきた。状況を話したら、水を一本分けてくれた。なくしたストックのことも話した。互いに「気を付けて」と言って反対方向に歩き始めた。

いくつものピークを越えて。前日にビバークした、朝スタートした地点まで戻って休んだ。Aさんはここで救助要請をすべきだと主張した。自分Sが正常でなく、Aさんも具合悪くなったら共倒れになるのでAさんが大丈夫なうちに救助を求めるべきだと言った。自分はまだ大丈夫と思っていたがAさんはそうは見ていなかったようだ。何しろ休むたびに自分は居眠りをしていたらしい。自分と

してはヘリコプターの救助要請というよりも現在地を確認し、後どのくらい歩けばペテガリ山荘に着けるのか確認したかった。携帯は通信不可だったが、119番は通じると思って、119を押してみたが、だめだった。

午前中に水を分けてくれた中年男性が坂を上ってきた。相当くたびれていて、休んだとたんにごろんと横になった。自分のなくしたストックを見つけてザックに縛り付けて持ってきてくれた。水がなくなったとのことでYさんがペットボトルの半分くらいをあげ、うまそうに飲んでいた。話してみると、島根県の人（以後Smさんという）で、山荘に奥さんを残して一人で登っているとのこと。Smさんは当日の18時までに山荘に戻らなければ、奥さんが翌日山荘から下山する人に消防への救助の要請をする段取りになっているとの話だった。彼は焦っていた。

自分たち二人はSmさんと一緒に行動できることに大変安心した。Smさんが先頭になって急坂を登る。薄暗くなってきて、急坂を登って緩やかになったところで、Smさんがここでビバークすると判断した。彼も疲れ切っていた。自分のヘッドライトも電池がなくなる一歩手前なのと、Smさんと一緒になので不安もなく納得した。Smさんは私たちに、テントカバーを体の下に敷くシートとして貸してくれた。

テントカバーを二つ折りにしたので前日の薄いシートの寝心地より数段ましで、竹の枝などもない登山道そのものに寝ることになった。

Smさんは翌日の3時ごろに出発したいと言った。ペテガリ山荘から下山する人達が出発する前に山荘に着きたいとのこと。自分のヘッドライトの電池が少なくなっていることを伝えた。

雨具を着けたりして横になり、すぐに眠り込んだ。この夜も天気の崩れはなく、気温が高かったので助かった。クマのことなど全く考えなかった。

25日（金）

まだ夜が明けきらないうちに起きて準備し3時半に出発した。Smさんを先頭に自分が真ん中、Yさんがしんがりで出発。自分のヘッドライトは一番照度の低いところで点いていた。

いくつかのピークを超えると夜が明け、何とか自分のヘッドライトは電池が保ってくれた。

4時半過ぎ少し平坦になったところで、地元の人と思われる元気なおじさんが登って來た。山荘ではSmさんの奥さんが夜通し寝ないでSmさんを待っていたこと、山荘から下山する人に消防への連絡を頼んでいたとのことなど。駐車場に長く停めてある福島ナンバーの車があることなどが話題になっていたらしい。これから登ろうとしているのに水を500cc一本くれた。

Smさんは気がもめて先に行くことになった。

自分たち二人はYさんを先頭に進むが、樹林帯の落差のある下りの急な左曲がりの所で自分がササや木の枝の上に飛ぶようにして大きく転んでしまった。後で聞いたらYさんは恐怖を感じたとのこと。幸い互いにケガはなかった。

しばらく休んだら自分は居眠りしてしまった。限界を超えていたのだろう。Yさんは鈴の音を聞いた、別なルートがあるかもしれないと言って探しに行った。自分はどのくらい眠ったか知れない。目が覚め、8時半まで待ってみたがYさんは戻ってこなかった。ホイッスルを鳴らし、大声で呼んでみたが反応はなかった。「下山します、8時30分 S」と書いたメモを見やすい枝にかけて一人下った。

40分ほど下り、登りの時に通った見覚えのある砂防ダムのある沢に着いた。ここで待つことにして、冷たい沢水で顔を洗ったりしていた。20分近く休みそろそろ下ろうかなと思っていたら。Yさんが下りてきた。安心する。ホイッスルも呼び声も聞こえていたとのこと。ここまで来ればもう安心だ。

樹林帯の中、沢沿いの明瞭で緩やかな登山道を下りペテガリ山荘に10時半ごろ着いた。山荘1階の出入り口近くに島根のSmさんはシュラフに寝ていた。脇に奥さんがいた。

自分たちは2階の荷物を置いたところで、浄水器で水をつくり、湯を沸かし、カップラーメンなどで食事をして横になった。

しばらくしたら上空からヘリコプターの爆音がして山荘の上空を行ったり来たりして飛んでいた。Smさんと奥さんが帰るとき、挨拶に2階まで上がって来てくれてヘリコプターの話をしてくれた。

消防署員2人が下りてきてSmさんが事情を聽かれた。山荘からの下山者の通報によってSmさん救助のために飛んできたらしい。駐車場に長く停まっている福島ナンバーの登山者の話も出たが、Smさんが福島の人も無事山荘に着いて2階で休んでいると言ってくれて、自分達へは呼び出しが来なかつた。山中から発信して通じなかつた携帯からの119番のことは何も聞かれなかつたとのこと。横浜ナンバーの車の話は出なかつた。

Yさんと話し、食料は十分あり、水は作ればよいので、自分たちは休養のためさらに山荘に泊まり翌日下山することに決めた。とてもその時の体調で山荘からさらに車まで6時間以上歩くことはできないと判断した。

ずっとシュラフに横になって過ごした。天気は下り坂なので山荘にやってくる登山者は少なく2階スペースは自分たちだけだった。夕飯時に水を作りお湯を沸かし、アルファ化米のきのこごはんを食べた。

26日（土）

食事をして、沢靴を着けて6時50分に山荘を出発した。初めは林道の比較的平坦な道と何回かの川の渡渉の後、山に入り樹林の中の680mの標高点を「乗っ

越す」のに往路よりも時間がかかった。680m 標高点から滑って転んだりしながら下ると、沢筋に入り、沢の脇を通ったり渡渉したりを繰り返す。往路よりも多く休みやすみ下る。

ペテガリ山荘への駐車場に着いたのは 16:30、往路の 6 時間 30 分よりも大幅に時間がかかり、10 時間近くかかってしまった。それでもペテガリ岳登山を成し遂げたこと、無事車にたどり着けたことに感謝した。

急いで沢靴を履き替え、20 日に 3 人が集合した道の駅三石へ向け出発する。道すがら Y さんの左前輪タイヤのホイールを探しながら行くが見つからなかつた。途中には馬が放牧されている牧場がいくつかあったが素通りした。道の駅三石には 18 時過ぎに着いた。大まかに寝床を作り、着替えを持って温泉の建物に向かった。温泉の隣はレストランでオーダーストップは 19:30 となっていた。

ほとんどが地元の人達だろう、温泉は混んでいた。子供もいた。7 時 10 分頃自分が早く上がりレストランの自販機で食事券を購入した。Y さんが何を食べたいか聞いてなかつたが、いろいろ迷惑をかけたので自分のおごりとしていたので、糠平（ぬかびら）牛のどんぶり（2500 円）と生ビールにした。

Y さんは 7 時半ちょっと前にやってきた。乾杯し、ようやく人心地が付いた。自炊以外の食事は 20 日に 3 人が集合し、道の駅三石のこのレストランでの昼食以来だ。何食ぶりだろう。

ピバーク 2 晩、遭難一歩手前の大変な苦労も、無事に下山して、山行が終わつてしまえば笑って話せる。人というものは「現金なやつ」だ。

8 時半前、お客様が少なくなり、片付けの音が大きく聞こえるようになったので、レストランを出る。それぞれ車に戻りすぐに眠り込む。

27日（日）

自分がトイレで早く目覚める。ズボンの太ももの辺りが白く汚れていた。よく見たら車の汚れが付いたもので、ホイールが抜けてしまうほどの砂利道の山道のせいだった。タオルで車を拭いていたら、偶然にも島根県の S m さんが寄ってきた。互いにびっくりしながら、ペテガリ岳での苦労話から S m さんの個人的な話まで話してくれた。「あるとき、山から帰ったら、奥さんが荷物と一緒に居なくなっていた」とことから始まり、今回の山行に同行した女性との出会いなど、こちらから聞くでもないことをいろいろ話してくれた。互いに名前を名乗ることも連絡先を交換することもなく、20 分も立ち話していたろうか。自販機で飲み物を買って戻って行った。

売店施設の左側に案内看板と小高い丘だったので、小さな鳥居をくぐり階段を登ってみた（写真次頁、上）。反対側（施設の裏、海側）は太平洋に面していてパンガローが建っていた（写真次頁、下）。夏の盛りには賑わうのだろう。

Yさんはゆっくり隣の車から出てきた。ぐっすり眠れるのはうらやましい。

自分はその日の夜に苦小牧港発のフェリーに予約してあった。予備日を2日取っていて、順調に山行が済めば、観光するか早めに帰って仙台で孫たちに会うことを想定していたが、予備日を山のために使ってしまった。予備日本來の使われ方をしたと言った方が適切か。



襟裳岬の観光もとりやめ、苦小牧港に向かって移動することにした。Yさんはまだ1日余裕があったが、途中まで付き合ってくれることになった。売店で日高昆布をお土産に買い、10:50三石発。

国道235号（浦河国道）を、太平洋を左に見ながら海岸沿いの道を北西に進んで行く。三石町は隣の静内（しづない）町と合併して現在は新ひだか町になっていた。1時間弱で新冠（にいかっぷ）町の道の駅「サラブレッドロード新冠」に着き食事することにした。テナントがいくつか入っていたが適當な店がなく、施設内のコンビニでソバのお弁当を買って共有スペースのテーブルで食事した。ピーマンソフトクリームも食べてみた。お土産にピーマンようかんと三石昆布焼酎なるものを買った。

Yさんとここでお別れし苦小牧港を目指す。Yさんは一人時間の過ごし方を知っているので自分は何も心配することはない。帰宅して数日後メールしてみたら、逆に自分が元気にしていることを喜んでくれた。ペテガリ山行では自分Sに対して相当心配したようだ。

サラブレッドロードの名前の通りにいくつもの牧場があり馬が遊んでいた。
(写真次頁)



途中、埃にまみれた車を洗車し燃料を補給し、苫小牧港に早めに着いた。予定通り 19 時発の「きたかみ」に乗り、夜、翌朝ともレストランのバイキング料理と展望風呂入浴を楽しむ。

28日（月）

11 時、仙台港着。孫たちに会うこともなく帰宅する。

日本三百名山残り 13 山。今季は北海道山行で終了。来季に向けて冬場の体力保持に努めたい。

令和 5 年 11 月 NO 120 アンチ・エイジング 山旅遊人

（メモ）

- 10月 14 日（土）安達太良山（百 1699.6m）から、足を延ばして安達太良連峰最高峰、箕輪山（1728.4m）に登ってきました。風もなく快晴の山行で、多くの登山者が登っていました。紅葉がきれいでした。
- 10月 19 日（木）学生時代の友人たちとの集まりの前日に車中泊し、神奈川県足柄郡箱根町の金時山（○1212m）から明神ヶ岳（1169m）まで縦走（3 度目）してきました。